

日本の大学生における躁傾向の研究

○島田理沙(駿河台大学大学院)・角田京子(東洋大学)

キーワード: 大学生, 躁傾向, 双極性障害

目的

うつ病はかつて内因性疾患とされていたが、大うつ病、うつ病性障害へとカテゴリーの拡大があり、DSM-5 におけるようにストレス関連性のうつ状態も含むようになった。主要なうつ病症状は、健康人においても測定可能であり、うつ傾向という概念も登場した。そこでは、うつ病と健康人のうつ傾向が連続的なものとして扱われ、うつ病の疾病特異性の議論は保留されている。

一方、双極性障害は精神病の範疇に留められ、DSM-5 ではうつ病性障害とは独立したカテゴリーで扱われている。健康人の心性との連続性の議論も、かつてのパーソナリティ類型論ならびに特性論において散見されるだけである。このように、うつ傾向とは違い、躁傾向を健康人において測定し、双極性障害の躁病相との連続性を検討する研究はまったく不十分なものである。

しかし、健康人においても躁傾向というものがあるとすれば、うつ傾向がそうであるように、躁傾向も精神健康に影響を与える可能性がある。しかも軽度の躁傾向は健康度を上昇させ、重度のそれは低下させるというような複雑な関連が認められるかもしれない。そこで本研究では、健康人においても躁傾向を測定できるのかどうか、また測定されたものは双極性障害の躁病相と関連しているのかどうか実証的に探索するため、大学生を対象に質問紙調査を行った。躁傾向尺度として、海外で開発された躁病尺度から作成した質問紙を、外的基準として妥当性を検討するために MMPI 軽躁病下位尺度を、一般精神健康との関連を検討するために GHQ28 を用いた。

方法

調査対象

大学生 188 名(男性 95 人, 女性 92 人, 平均年齢 19.8 歳)。

調査内容

任意性とプライバシー保護のもとに質問紙調査を行った。フェイスシート: 学部, 性別, 年齢を訊ねるもの。

躁傾向尺度: 39 項目 4 件法。双極性障害の患者の状態を測定する自己記述式尺度である The Altman Self-Rating Mania Scale(ASRM), The Internal State Scale(ISS), The Self-Report Manic Inventory(SRMI)の 3 つの尺度を日本語に翻訳して組み合わせ、精神病症状の項目や質問内容が重複している項目、日本の大学生の状況にそぐわないものは除外した。ASRM の 5 項目は全て含まれている。

MMPI 軽躁病下位尺度: 46 項目 3 件法。

GHQ28: 28 項目 4 件法で、採点は 2 件法で行う。

結果

躁傾向尺度で項目分析を行い、11 項目でフロア効果を見出した。これには ASRM の睡眠欲求の減少の項目も含まれた。これらの項目を除外した躁傾向尺度の 28 項目について主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、最終的に Table 1 のような因子構造を得た。

第 1 因子にはポジティブな自己評価の項目が集まっており、「自信」因子と命名した。第 2 因子は陽気さや多弁を表す項目が集まっており、「快活」因子と命名した。第 3 因子には集中困難と混乱の項目からなり、「散漫傾向」因子と命名した。第 4 因子にはイライラと他者へ不快感の項目からなり、「不機嫌」因子と命名した。

これらの因子が、一般人の躁傾向を反映していると見なせるのかどうか、精神健康と関連するのかどうかを検討するため、因子ごとにサンプルを得点の低群, 中群, 高群の 3 群に分け、MMPI 軽躁病下位尺度得点と GHQ28 得点について、それぞれ分散分析をおこなった。各因子の三つの群における得点の平均値と分散分析で見出された統計的有意差を Figure 1~4 に示す。「自信」因子得点が高いと GHQ 得点は低く、「快活」因子得点が高いと MMPI 軽躁病下位尺度得点が高く、「散漫」因子得点が高いと GHQ 得点が高く、「不機嫌」因子得点が高いと MMPI 軽躁病下位尺度得点が高く GHQ 得点も高いという傾向が有意であった。

考察

まず躁傾向尺度の項目分析では、睡眠欲求の減少は双極性障害に特異性が高く、健康人とは不連続なものであると示唆された。

また同尺度の 4 つの因子については、「自信」は躁状態とは不連続であり、むしろ精神健康度の高さに関連していた。「快活」は躁状態と連続していることが示唆された。「散漫」は躁状態との連続性は有意にはなかったが、精神健康度の低さと関連していた。「不機嫌」は躁状態とは関連せず、同時に精神健康度の低さと関連していた。

以上のことから、一般人に双極性障害の躁状態の尺度を適用すると、疾病特異性が高く測定できない症状があること、測定可能な諸項目は因子構造を持っているが、因子のなかには躁病相と健康人の状態とに連続性があるものとなないものがあることが示唆された。

Table 1. 躁傾向尺度の因子分析

	1	2	3	4
自分は素晴らしいと内心では思っている	0.86	-0.04	0.02	0.12
私は自信があると感じる	0.78	0.10	0.08	-0.15
私は有能な人物であるような気がする	0.78	-0.04	-0.11	0.05
私は陽気である	0.03	0.83	0.05	-0.09
私は活発である	0.00	0.74	-0.09	0.06
私はよく話す	-0.04	0.57	0.01	0.07
私は集中できない	0.02	-0.02	0.82	0.02
私はすぐに混乱する	-0.04	-0.01	0.57	0.01
私はイライラしている	-0.07	0.11	0.07	0.68
他の人々が私の気に障る	0.10	-0.04	-0.04	0.66

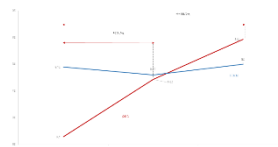


Figure 1. 「自信」と MMPI-Ma, GHQ

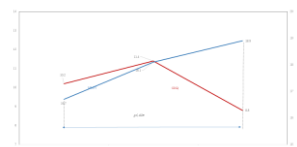


Figure 2. 「快活」と MMPI-Ma, GHQ

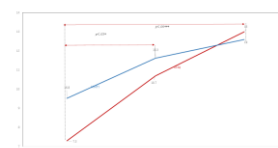


Figure 3. 「散漫」と MMPI-Ma, GHQ

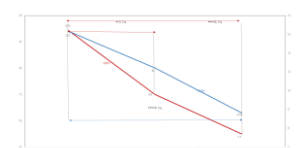


Figure 4. 「不機嫌」と MMPI-Ma, GHQ

本研究は利益相反を有せず、駿河台大学心理学研究科臨床心理学専攻倫理審査委員会の承認を受けている。

(SHIMADA Risa, SUMIDA Kyoko)